
博士の守護者

朧月朱狐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

博士の守護者

【Zコード】

Z9364Y

【作者名】

朧月朱狐

【あらすじ】

誰にも愛されたことがなかった少女は神様に会い、トリップする。トリップした先は、生前愛読していた「家庭教師ヒットマンREBORN！」の世界だつた。

頼んでもいないのに神様からチート能力を貰った少女はトリップしても

また愛されることはなかった、そんな時一人の博士に出会い世界が変わる。

プロローグ

いつも通りの日常だった。

朝起きて、学校に行って、部活には入っていなかつたからそのまま家に帰る。

たまに違うといえば、本屋に行って好きな漫画や小説を発売日に買いくだけ。

今日は好きな漫画の発売日だった。

学校帰りに寄り、数冊の漫画を買った後は、早く読みたくて足早に家に帰る。

家に帰って、買った漫画「家庭教師ヒットマンREBORN！」を読む。

今は丁度継承式編のど真ん中だった。
週刊誌の方も読んでいるから、買っても内容は分かっているけど、でも面白いから読み返す。

「早くアルコバレー編に入らないかな？」

継承式編に不満を持つわけではないが私の好きなキャラがアルコバレー編でたくさん出てくるからだ。

よく好きなキャラクターランキングではこのキャラに投票している。

「ヴェルデ博士まだかな」

そう、私は緑色のおしゃぶりの持ち主、ヴェルデが一番好きなキャラなのだ。

別に他のキャラが嫌いな訳ではなく、ただ単純に、ヴェルデが好きなだけである。

よくやじで見るトロッコまではいかないけど、思つてしまつ。

「博士に会つてみたい」

買つてきた漫画を全て読み終わり、読みかけだつた本を読む。それで私の一日が終わる。

毎日と変わらない日常を繰り返して、ある日の帰り道だつた。いつも渡る信号で待つていたときだつた。

ここは学生も使う通りのためちらほらと中学生やら他校の学生の制服が見える。

友達と帰る者が大抵の風景、私にはそんな事は関係なかつた。それでも見ないよつに、鞄から持つてきていた読みかけの本を開く。赤になつていった信号が青に変わる。

私はそれを確認して、本を閉じずそのまま本を読みながら信号を渡る。

ここを渡ればすぐに私の家に着く。

そう思つていた。

だけど

キキイイイイ

ブレー キのきる音がした。

顔を上げたときに見たのは田の前まで迫つていたトラックだつた。

ドンッ

身体にすごい衝撃が走つた、次に感じたのは浮遊感だつた。それもすぐに叩きつけるような衝撃に変わつた。

自然とそんなには痛くは無かつた。

ただ寒い、と感じただけだつた。

呆然としているのか自分が今置かれている状況が分からなかつた。

「おい、女の子が轢かれたぞ」

「だれか救急車呼んだかつ」

周りの人の声が聞こえた。

ああなんだ私、轢かれたんだ。

痛みも無い身体、ただ寒いと感じる身体。

そして聞こえた言葉にも冷静な思考。

すぐにその答えが出た。

私は死ぬんだ。

不思議と生きたいという思いは無かつた。

それもそうだろうと思つた。

日頃の自分は生きながらに死んでいるような人間だつた。

唯一の娛樂だつたのが漫画やPC、本だけだつた。

それに自分が生きていて喜ぶ人間もいない。

心のどこかでほつとする自分がいる。

ようやく死ねると。

「いっちです、早く！」

「おい、君大丈夫か！？」

救急隊員が来たようだけど、私の身体はもうもたない。

意識が朦朧としてきた。

見えていた景色がぼんやりと霞んできた。

もうこれで最後だと感じる。

もし、もし最後に心残りがあるとすれば

ヴェルデ博士に会いたい。

それしかなかつた。

叶わないと思つても漫画から見れるだけどよかつた。
でもそれももうできない。

私は、もうこの世界からいなくなる。

即死じやなかつたのがあれだつたかな。

本当にもう意識がなくなつてきた、目も靈む。

その日、一人の女の子がトラックに撥ねられ死亡した事故がニュースなので放送された。

プロローグ（後書き）

初めて投稿しました、ちょっとトリップの王道風に仕上げてみました。

書いていて、あつグダグダと思いつつも書いていて楽しかったですし
あらすじはこんなのでいいのかと思いながら書きました。

ここで一つ、チート能力を貰っていますがそれは後々、博士につけ
てもらうという

形で成り立っているものもありますので、最初から使えるチートと後
から使えるチートに分かれているので、そのところよろしくお願
いします。

ここまで読んでくださいありがとうございました。

神様に会いました。

「…い、…おい」

声が聞こえる。

死んだはずなのに、何故か声が聞こえる。

「…おい、…おい」

何度も話かけてくる。

呼ばないで、せっかく死ねた…のに?」

「…おい…いい加減起きろ」

一気に目が覚めた。

おかしいと思った、死んだはずなのに何故思考が働く?耳が聞こえる?

「やつと起きたか…」

「誰ですか」

田が覚めて初めに見たのは、美形のドアップだった。あと数センチとかいうところまで、顔が近づけられていた。ここまで来ると美形でも怖い。

「近い、です」

「ん? ああすまんすまん

そういうと田の前の人はすぐに顔を退けてくれた。

横になっていた私は上半身だけを起こした。

何も無い真っ白な空間。

そこに私達はいた。

「あ～寒つ、よつ」^{いしょ}

私を起こしたのは男だった。

男は腕を摩りながら、服についていた大きな袋から

「たららんたら^{いだつ}炬燵^{けと}」

どつかのネコ型ロボットの真似をしながら、結構大きな炬燵をだしだ。

それを置くとすぐに中に入る男。

よく見ればテーブルの上にみかんが入った籠がある。

「暖か～、お前も入れよ寒いだろ」

そう言わると何だか肌寒い。

お言葉に甘え、私も炬燵の中に入った。

あつ結構暖かい。

あまりの気持ちよさに私達はぬくぬくと炬燵の中で和んでいた。

男は籠からみかんを取り剥きだす。

のんびりとした空気が流れ出した最中、私は思い出す。

「あの、私死んだはずなんですが…」

「ん？ ああ死んだよ」

軽つ。

だが私が死んだことは事実だった。

「では、あのなんで私ここに居るんですか」

「そのことね、ぜひくつぱりとお前がよつとアーリップして来い」

「はい?」

トリップして来い? 何その『お前がよつとアーリップしてプリント買つて来い』みたいなノリ。

一瞬ポカーンと呆けてしまった。

そんな私にお構いなしに男は一個田のみかんに手をつける。

「あのトリップして来いとは」

「言葉通り、まあいきなり言われてもわからんねえよな。簡単に説明すると

お前は確かに死んだ、んで偶然俺がお前が死んだことに居合わせた。 いうなれば俺の気まぐれだ」

気まぐれ。

「気まぐれってなんですか」

そんなことのために死んだ私をここに呼んだのか。

私は言いようも無い怒りがこみ上げてきた。

そのまま死んでいたかった。

なんで、なんで

「なんで私のことをほっておいてくれなかつたんですかっ！…」

目頭が熱くなる。頬に涙が伝う感触がある。

私は泣いた、普通ならそのまま死なせなかつたことに泣くのに、私は何で泣くのか分からなかつた。

心のどこかで安堵している自分がいる。

自分の心なのに、何で安堵しているのか分からなかつた。

「確かに気まぐれでお前をトリップさせることに對しては、俺もすまんと思つてゐる。

謝つたら氣まぐれでもなんでもないがな。

だが俺はお前の願いを叶えさせるためにトリップせんだよ

「私の…願い…？」

死ぬとき私は何を願つた？

死ぬことに対して私は何も思わなかつた。

なら

『ヴェルデ博士に会いたい』

「あれが…」

男はよつぽど私の反応が面白かつたのか、笑いながら

「さて、トリップにあたつて王道の事だ。何の能力が欲しい？」

～おまけ～

「あつ言つ忘れたけど俺神様だからな～」

「アツなんですか（もぐもぐ）」

「えつ驚かなーいの」

「炬燵出したり、私をここに来させたり、トコシッせせるなんて言えるのは神様ぐらいですよ」

「まあそつだな」

「まあでも最初は半信半疑でしたけど」

「なにそれつ」

「だつて神様には見えませんから」

「……俺つてそんなに神様に見えない?」

「（ハハハ、もぐもぐ）」

「…………お前もか。」

「あつこのみかん甘くて美味しい」

神様に会いました。（後書き）

「まぐれだけじゃまぐれじゃない、なんだこの矛盾は―――！」
自分で書いておかしいと思いつつもこれで仕上げてしまつ自分。
「」

最後まで読んでくださりありがとうございました―――！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9364y/>

博士の守護者

2011年11月30日12時53分発行